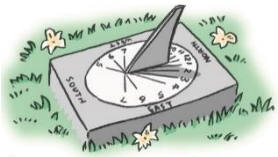
家庭数

学校だより
いなほ 稲穂
市川市立平田小学校
No.7
令和５年６月８日
校長　蜂須賀　久幸
～共に学ぶ 共に育つ 共に感動する 共に未来を創る～
https://ichikawa-school.ed.jp/hirata-sho

学校教育目標
夢をもち、たくましく生きる
子どもの育成



時に記念日に思う、共有する時間を有意義に

赤ん坊からお年寄りまで、誰にも等しく与えられているもの、それが「時間」です。有効に使っても無駄遣いしても同じ２４時間。この自分に与えられた時間が、知らない間に盗まれていたとしたらどうでしょう？ミヒャエル・エンデの『モモ』はそんなお話。人々は時間を節約するために、人生を楽しむことを忘れてせかせかと生活をするようになるのです。「時間貯蓄銀行」が節約した時間を盗んでいるとも気づかずに…。読んだことのある人もいるでしょう。

タイムパフォーマンスを略した「タイパ」という言葉を聞くことが多くなりましたが、かけた時間に対する満足度を表します。早送りで見るファスト映画、にわかに人気を集める冷食宅配などもその一例です。明後日６月１０日は「時の記念日」。節約という概念だけでなく、目に見えづらい時間の有効活用・パフォーマンスを意識するよい機会かもしれません。

ところで、順番などを決める際に、「時計回り」という言葉を使うことがあります。時計が右回りに動くことは世界共通で当たり前に思っていましたが、その理由を説明できるでしょうか。どうも由来は日時計にあるようで、日時計の影の動きが西→北→東の右回りとなることから右回りが採用となったわけです。では反対周りの南半球の時計の針の動きが気になります。でもやっぱり右回り。機械仕掛けの時計は北半球から広まっていったことがその理由です。

話は逸れますが、２０年前までは土曜日が登校日で、その日に限って半日授業でした。会社も含めて、午前中だけで仕事が終わる場合を「半ドン」と呼んでいたのですが、日本でまだ時計が普及していなかった明治から大正期、正午を知らせる大砲の空砲を鳴らしたことに由来します。この大砲のドンという音が正午を伝えるものであったことから「半ドン」という言葉が誕生したのです。

そんな日本では、時間を守れない人はあまり信用されない傾向があります。ですから、仕事でもプライベートでも、他人と約束した時刻を守る習慣が定着しています。学校でもチャイムで注意喚起しますし、宿泊学習などでは「５分前行動」を指導するとともに、きちんと守ろうとする子供たちばかりです。保護者の中にも５分前行動を言われた経験のある人は少なくないはずです。

これらは「時間を守る」＝「時間を大切にする」ことの表れといえます。しかし、外国の人にとって優先されるのは、「共有する相手の時間と自分の時間の両方を有意義なものにする」ことだといいます。一緒に過ごす時間の中でどれだけ理解し合えるか、次のステップを明確にできるかが求められているわけです。

いずれにしても、「時間泥棒」の罠に嵌まることなく、本当の意味でのタイムパフォーマンスを子供も一緒に考えていきたいと思います。時間に追われるのではなく、時間を追いかけながら…。必要なところにはじっくりと時間をかけて…。

七夕イベントのお知らせ

市川市青少年相談員連絡協議会が主催する七夕イベントが下記のとおり行われます。展示場所の近隣校の児童に短冊を配付して願い事を書いてもらおうというものです。

私たちの住むまちを知り、愛着がもてるようにするために、ぜひ期間中に地域イベントにぜひ足を運んでみてください。

記

展示期間	令和５年７月２日（日）～１５日（土）
展示場所	八幡不知森（通称：藪しらず）　※第一庁舎斜め向かい側
そ の 他	＊夜間ライトアップ 7：30～9：00 頃 ＊石塀沿いに飾られ、奥まで入ることはできません。 ＊ランダムに吊るされるため、自分の作品（願い）を見つけることは困難です。 ＊各学級で全員に配付します。参加する人の作品（願い）は６月２８日までに学級で回収します。

特別支援教育が特別ではなくなる日を目指して

〈東海テレビｗｅｂニュースを参考・引用しました〉

８×２センチメートルの長方形の枠の中に、自分の名前を利き手ではない方で書いてみてください。どんな感じでしょうか。私もやってみました。結構きれいに書けましたが、指定された枠の中に書くというのは緊張します。当然、利き手より倍以上の時間がかかります。これを家族でやって互いに見合ってみましょう。褒める部分がきっとあるはずです。それは、出された課題がどれだけ難しいかを自分もわかるから誉めたり認めたりする声かけができるわけです。

また、高速道路で渋滞に巻き込まれてイライラしている場面を想像してみましょう。こんなとき、どのくらい渋滞しているか、何分くらいかかるのかといった渋滞情報があって見通しがもてるとイライラが解消できそうです。車内でテレビなどを見て気を紛らわすことも方法の一つです。

これらは、様々な障害の理解に役立ちそうです。ともに、約四十年間特別支援教育に携わってきた岐阜聖徳大学の安田教授の話です。周囲の環境が過ごしやすさにどれだけ影響を与えるかをイメージすることで、障害による生きづらさの理解や向き合い方を学ぶことにつながるのです。

二〇二二年十二月に文部科学省が公表した調査結果では、「通常学級に通う小中学生の八・八％に発達障害の可能性がある」とされています。つまり、一学級あたりにすると約三人前後いる計算になります。だからこそ、安田教授の言葉が胸に残ります。「診断がついていようがついていまいが、どの子も、ある意味でのデコボコを持っている。どの子にもきちっとした理解と対応をしていく延長上に発達障害があったり、重度の障害があったりすると思う。だから、特別支援教育が特別ではなくなることが大事なことだ」と。レッテルを貼ったり色眼鏡で見たりすることのない共生社会の第一歩が学校かもしれません。

家族や教職員、クラスの友達など周囲の手助けのもとで確実に成長している子供たち。凸凹があって当たり前で、違いを受け入れ尊重する心が、生きやすい学校・社会を創ることになります。「違いを認め、互いを尊重する心」を学校・家庭・地域みんなが意識して、特別支援教育が特別でなくなる日を目指していきたいと考えます。